

鈴木京子

〈鳥海山麓だより〉 全編

季刊「展景」二〇一一年六月～二〇一六年九月

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一七二〇二

info@muninokai.com

Copyright©2016 MUNINOKAI. All rights reserved.

〈鳥海山麓だより〉二〇一二年春

犬が西向きや尾は東

鈴木京子

二〇〇六年の夏から、秋田県と山形県の県境、日本海に裾野を浸す鳥海山の麓で暮らしている。

近年、注目を集めている半農半Xは「自分たちが食べる分だけの『小さな農』を行いながら、好きなことや天賦の才を活かした仕事で社会に貢献し、一定の生活費を得るという新しいライフスタイル」だそうで、「X」は人が本来持っている天賦の才能とか「未知なるもの」を意味するらしい。

一方、私は、農(Agriculture)と無償活動(Volunteer)と自分なりの現金収入の道(X)が、時間的にも労力的にも等分に近い「AVX」だ。Xに「才能」とか「やりがい」とか「社会貢献」など求めない。好きかどうかも関係ない。労働や物の「交換」では賄い切れない生活必需分の「現金」を、できるだけ他者から搾取することなく稼げればいい。

田舎暮らしで一番の難関は何と言ってもXだが、暮らし始めて二年を過ぎるころから、少しずつ「手間(稼ぎ)」を頼まれるようになった。

雪解けすぐ四月半ばの稲の種まき、それからひと月後の田植え、パプリカや大根、メロン、スイカ、庄内柿などの畑仕事などなど。地元の人が「あれだけはイヤだ」と口をそろえる無農薬田の草取りは時給一〇〇〇円。それ以外はだいたい七五〇円。どの作業も農繁期の一時的なものだから、一日だけ、三日だけ、長くても一カ月、中には一日三時間を一週間というものもある。どの雇い主さんも町の農業委員会が定める「農作業基準賃金表」を下回らない金額をきちんと払ってくれる。

ほかに、稲刈り時の一カ月は農協のコメ倉庫、十一月と十二月のもち屋、二月と三月は合宿生相手の



自動車教習所の食堂など、日雇い・季節雇いがある。

山形県の最低賃金は時給六四五円だから、私の手間賃は高いのかもしれない。しかし、年々、声をかけてくれる人が増えている。つまり、田舎では引き受け手のいない労働なのだ。そして、そのおかげで私の暮らしが成り立つ。

専門的な技術は何も身に付いていないけれど、四十女がひとり、ここで食べて暮らしていきける自信がついたので、今年からは「百姓おんな」を名乗ることにした。

今年の春は二軒の農家に雇われて九日間田植えをした。

ここ庄内平野は昔からのコメどころだ。四月半ばには雪解けの進む鳥海山の山肌に「種まきじいさん」の雪溪が現れて麓に稲の種まき時期を知らせる。そして「さつき」がやってくる。

日本語で「さつき」と言えば五月だが、ここでは田植えそのものことも「さつき」と言う。雪が解けて白鳥が帰っていった田にいつせいに水が張られ、その水鏡にキラキラと鳥海山が映る。「さつき」が近づくと町中がそわそわし、死にそうだったじいさんが生き返る。ホント！「年を越せるか」と心配されていたじいさんが、野良着を着て杖をついて登場したりして本当にびっくりするけれど、ここでは珍しくない。

稲作農家トオルさんの妻ノリコさんは町の病院で事務職をしている。トオルさんちの田植えでも、七十代のおじいちゃんが目を光らせる。息子が乗る田植え機の前足を細かくチェックし、時に大声での親子ゲンカにもなる。

「おじいちゃん、元気だね」

「んだあ。田のことはお父さんにも任せ切れなくて。田植えが近くなるといつもケンカみてえなつて。今朝もご飯食べながら言い合ってるもんだから、娘に『おめえらあつちでけっ（食え）』って言われて」

「さつきになれば、死にそうないさんも生き返るもんね」

「んだ、んだ。オレ、病院に入院してるおじいさんに、今週末はさつきだねって言ってしまったら、おじいさん、『さつきか？へば、帰んねばなんねっ』って騒ぎ出して。さつき教えたオレが看護婦さんにごけられた（叱られた）」

七十代以上の人たちは、苗代・手植え・手刈りの時代を知っている。高度経済成長でどんどん上がる労働者の賃金と都会の繁栄を横目に、一粒でも多く収量をあげ少しでも豊かになろうと、田の中を這い回ってきた人たちだ。積み上げてきた確かな経験と自信を、そう簡単には曲げられない。

「どこの家でも、息子はオヤジの言うことを聞かないもんだ。犬が西向きや尾は東だ」

昨年の農協理事選で落選し、タダの農民に戻ったハジメさんが教えてくれた。犬が西向きや尾は東……。なるほど、確かにそうだ。

田植えでは田植え機に苗を積み込んだ後、往復して帰って来るまでの間がおしゃべりタイムになる。区画整理で田が大きくなってからネ、四、五分話せる。

六十二歳のハジメさんは農家の長男だが、農家がイヤでイヤで仕方なかった。なんで？
「だって、貧乏だからさ」。

今でも夫婦ゲンカをすると妻が持ち出す話がある。ハジメさんが若い頃、農家の跡取りや嫁が自分の報酬をもらえることはほとんどなかった。おそらく、渡せるだけの世帯収入もなかったのだ。子どもが生まれても家族旅行にも行けなかった。

あるとき、自分の家の稲刈りが済んでから他の家の手伝いに行き手間賃を得て、鳴子温泉に念願の家族旅行に行った。子どもは六歳と三歳。

「カネもなかったし、子どもがそんなに食べるとは思わなかったのさ。二人分しか食事を頼まなかった。そしたら、母ちゃんのお膳を子どもがみんな食っちゃった。『子どものことも考えず自分だけ食べて私は何も食べられなかった、アンタはそういう人だ』って、いまだに言われる」

そりゃ、妻が正しい。ずっと言われ続けるしかないネ。

「地震や津波だけならなあ……」

水を張った田の中を、まっすぐこちらに向かってくる田植え機を見つめながら、ハジメさんが言った。大震災後の原発事故の影響で福島では水田も作付けが制限された。

残留放射能の高いところでは今年の作付けは制限されることが決まりました——そう伝えるテレビニュースを聞いて、「今年だけ」と理解する農民はいない。



田植え機を運転する著者

〈著者プロフィール〉 鈴木京子 1968年、茨城県生まれ。フリー記者。2006年より山形県遊佐町で農と稼ぎの百姓暮らし。

〈鳥海山麓だより〉二〇一一年夏

オタマジャクシ供養塔

鈴木京子

夏は、農村の手間賃労働者にとって最高の「稼ぎ時」である。

まずはダイコン。田植えが終わって間もなくの六月始めから、カワマタさんちへ一週間通う。カワマタさんと妻のケイコさんが朝早く収穫し、葉を落として洗った約三〇〇本のダイコンは、昼過ぎには水分が蒸発して、私を待っている。

一本ずつヒゲ（あの細い根のことね）をむしって、サイズを合わせ、一箱当たりの重量を計りながら、詰める。作業場の納屋にはちょうどツバメが巣をつくり卵を温めている。ラジオから流れる演歌を聞きながら（カワマタさんのラジオだからね、チューニングをいじるわけにはいかない）、一日三時間くらい作業する。いつもなら一人静かな心地よい労働なのだが、今年ほううるさかった。町議会選挙とぶつかったのだ。

ここに越して来て驚いたことの一つが、地方選挙の投票率の高さだ。前回二〇〇七年の町議選が七九%超。二〇〇九年の町議補選、町長選ともに七八%超。これは、市議選で四〇%台、市長選で三〇%台、県知事選で二〇%台の埼玉から来た人間には驚異の数字である。同じ部落のトオルさんが、初めて投票する娘に「オメエ、選挙いがねど（行かないと）、チェックされて罰金だよ」と言ったのが、冗談に聞こえない。

選挙カーが近くに来ると、隣りのぼっちちゃんは、わざわざ家から出て来て手を振った。支持者なのかな。ん？ ぼっちちゃんは次の選挙カーにも同じようにした。あれ？ 結局、四、五台に手を振った。





「たいへんですね」

「さつきカンジさんに振ったさげの。おぼえた人にはみなふんねばなんね（知っている人にはみんな振らなければならぬ）」

そういうことか。結局、ぼっちゃんが誰に投票するかは、その行動からはわからないのね。

そんな選挙だから、一人ぼっちで作業しているとたいへんだ。ましてカワマタさんは地域のリーダー格の農家さん。人影を見つけて、選挙カーが停車し、たすきがけの候補者が「もつけど、もつけど」と言いながら納屋に入ってくる。

「あの、家の人は畑で誰もいませんが…」

「んだかあ…。んまあ、いなだいなだ（いいんだ）。へば、まずはよろしく頼むのっ」
その度に軍手を外して握手した。

六月中旬からはいよいよ田の草取りだ。今年は、私と私の同居人、そして田んぼのオーナー・エイジさんの三人で、ひと月半をかけ、約三町歩（三ヘクタール）を二周した。

一周目はイネ丈がまだ三〇センチ程度。田んぼは、本当たたくさんの名も知らない命で満ちていた。オタマジヤクシ、カエル、その中間、生まれたて五ミリのイナゴ、脱皮したのトンボ、タニシ、ホタルの幼虫、その他いっぱい。

そんな田んぼで、今年初めて経験した、とても大切な音が二つある。オタマジヤクシを踏みつぶしてしまう音と、トンボがツバメに捕獲されてしまう音だ。

田の草取りは一条（一列）をまたいで入り、左右それぞれ二条の草に手を伸ばしながら前に進む。人が動けば虫たちは逃げるけれど、その進行方向に逃げ続けるとキリがないのよ。何よりオタマジヤクシは多過ぎる。私が足を踏み出す度に、何匹かがゴムの田植え靴の底で「ポチッ」。オタマジヤクシの供養塔を建てたいという私に、「踏むほどたくさんいるなら、いいんじゃないか」とエイジさん。

そのエイジさんが「こら、あっち行け」「わあ、来るな」「ダメだ、飛ぶな」と騒いでいた。見ると、エイジさんの周囲をツバメが数匹、旋回している。稲株に身を隠しているトンボは人が動くと逃げる。逃げようと浮上した一瞬を、すばやくツバメが捕獲する。

「クシャッ」

「パクッ」

これが、ツバメがトンボを捕まえたときの音。いつの間にかツバメは十数匹に増え、三

Photo : Kyoko Suzuki



山形県遊佐町から望む鳥海山

人の進路を狙っている。人間からわずか二〇センチの距離でトンボを捕まえる。「ツバメにとつて、オレら、追いつ子になっちゃったんだね」と、エイジさんがあきらめたように言う。そうなんだよね、人間よりも他の生物が多い農村の暮らしの中では、虫も鳥もそのほかの動物も、人間を一方的に怖がったりしないし、利用さえする。人間様が、生態系の序列の一番上にいると勘違いできるのは、人間様の姿しか見えない都会でだけ、ダネ。そんな田んぼも、草取り二週目に入った七月には、イネ丈が膝上にまで成長し、オタマジャクシやトンボの姿はない。ときどき鴨の親子の足跡がペタペタと残っている。七月後半からお盆にかけては、メロンやスイカの箱詰めに通い、そして、今年初めて、お盆用生花の収穫と出荷にも行く予定。さあ、それが終わったら一休みだ。そして、もうひと月半もすれば稲刈りが始まる。

〈鳥海山麓だより〉二〇一一年秋

切ない話

鈴木京子

秋ねえ…。十一月は初旬であつてももう「冬」だ。

九月末に刈り入れた稲を二週間ほど天日乾燥させているうちに、冬の気配を感じるようになり、十一月に入ればもう、寒がりの私なんかは外での仕事が苦になってしまう。

だから、この期間、関東で暮らしていた感覚で秋を楽しんでいたりと、冬支度に出遅れて痛い思いをする。冷たく容赦のない強風と雨がやってくる前に、夏の畑を片付け、来春用にたまねぎの苗を植え、家の周りの風囲いを終わらせる。

そんな暮らしのリズムに気づかなかつたころ、「あれ、隣のじっちゃん、もう風囲いしてるよ。まだ早いよね」なんて余裕かましていたら、翌週末には強風と雷と突発的な雨が襲ってきて、あまりに危険で外での作業なんかできなくなった。結局、その年は、冬を迎える作法も、お迎えした冬の怖さも知らないまま、冬に突入した。

思い返すと、移住一年目のあの十一月に「生涯で一番寒かった家」を体験した気がする。今はもう慣れたからね。

それにしても、今年の秋はどこにあつたのかなあ。

ここに暮らすようになって、「収穫の秋」という慣用語も自分にはしっくりこなくなつた。品目と量でいえば「収穫の夏」ダヨ。ああ、コメ農家さんにとっては「収入の秋」なのかな。秋ねえ…。まだほんのりと夏の名残があつてポカポカとした十月下旬。あの半月くらいが短い秋なのか。関東で着ていた秋用の衣類は、もう何年も着る機会がない。

ところで、どうしてこんなに「秋」を考えってしまうのか。結局「冬」を考えたくないのかもしれない。

去年は十一月と十二月の二カ月間、もち加工場で働いた。時給七五〇円、朝七時半から夕方六時過ぎまで、十二月に入ると日曜日も出勤になった。重いし、寒いし、時間に追われるし。私にとっては過去最強の過酷な労働だったのだが、そこで愚痴もこぼさず主力と



遊佐町から望む十一月の鳥海山

して働いていたのが、四十年代後半から五十代の農家女性だった。

彼女たちは「こんな労働条件なのに」と私が腹立たしく思うほど、よく働く。「こんな労働条件」とは、たとえば――。

「作業開始一〇分前に身支度を整えて事務所に集合」が決まりなのだが、事務所の時計は五分進んでいる。一方、作業場の時計は時間ぴったり。だから、十二時に作業を止めて、着替えて、昼食をとって、また着替えて集合するまでの時間は、実際には四五分。上の白衣、エプロン、帽子、マスクなどの身支度に五分はかかるからネ、四〇分しか休めない。始業時間も一〇分前集合（実際には一五分前！）だが、朝礼には二分もかけずに作業開始となるので、少なくとも毎朝一〇分は余計に働くことになる。さらに、タイムカードは三十分単位なのに、夕方六時十分過ぎの終業が多く、六時三十分になる前にロッカー室から追い出される。

こんな細かい（せこい！）ことが、どれほど会社の利益に影響するのかは疑問だが、工場を取り仕切る（社長の）奥さん”の激情型性格もあって、なかなか季節労働者が定着しないらしい。

そんななかで、十年近く働いているのが、ミヨちゃん、アベちゃん、オトちゃん、コバヤシさん。彼女たちは、手のひらの水ぶくれが手袋の下でつぶれるほど、つきたての熱い餅を一日中ちぎっては測る。かと思えば、冷たい水で一日中、六〇〇キロの餅米を洗う。驚いたことに、みな農家の跡取り娘だった。

ある日の昼休み、みかんを食べながら「昔だば、みかんの出稼ぎに行ったけよのお」とアベちゃんが言った。現在四七歳の彼女が小学生の頃まで、彼女の家では牛の世話がある父親を残し、冬は祖父母と母が静岡のみかん農家へ出稼ぎに行った。私とアベちゃんは五歳しか違わない。一九七〇年代、さみしい庄内の冬をアベちゃんは、母も祖母もなく、父親と孫ばっちゃん（曾祖母）と過ごしたのだ。切ないナア。

「ミヨコ、おめえだけ休みか？ ああ、おめえ、結婚遅いさけの」

ある日の朝礼で、奥さんが言った。アベちゃんとミヨちゃんは同い年だが、結婚の遅かったミヨちゃんにはまだ小学生の子どもがいて、その学校行事で休むのだという。気にも留めなかったその話を、内緒でこっそり集まった飲み会で思い出すことになった。

ミヨちゃんには三人の娘がいて、長女は高校卒業後、上京を望んでいるらしい。「行ぎてものはしらがねっ。もう少し餅屋で稼がねばなんねのっ」とミヨちゃんはビールジョッキを持って気合を入れた。「行きてば行がせる。おめえも苦労したんでろっ」と誰かが応じた。黙って隣りに座っていた私にミヨちゃんが語り出した。「オレ、跡取りなんどもっ、結婚してえ人できてのっ。反対されるとも思わねで、嫁行きてって言ったたら、両親もじっちゃんもばっちゃんも『なへ、嫁に行がねばなんねなだ（なぜ嫁に行く必要があるのか）？』ってのっ。で、オレ、結婚、おせえなだ（遅いのだ）」。

一緒に働いてひと月も経たない私にあっけらかんと話しておいて、だけどミヨちゃんは「なへ、嫁に」のところで一瞬声をつまらせ、そのあと、目を赤くさせた。たった二十年しか経っていない別れだもの。切ないなあ。そんな切ない話を、季節労働先の奥さんにも知られてしまう環境で生きてきた二十年だもの。
ひどく切ないヨ。



Photo : Kyoko Suzuki

へ鳥海山麓だより4▽二〇一二年冬

ここで生きる

鈴木京子

ここひと月は、食事の回数より「雪除け」した回数のほうが絶対に多い。つまり一日三回以上のこと。

引越してきた当初は、なぜ雪が降り続けている中で、ご近所さんたちが雪除けしているのか理解できなかった。止んでからすればいいのにサ。ハイ、止むまで待っていると手遅れなのでした。玄関の戸が開かなくなり、車は発進できなくなり、降り積もった大量の雪を除けるのには、想像以上の力と時間が必要になる。だから、小降りになったときを見計らって、せめて五センチ位でこまめに除ける。

さらに朝の七時前に、これまたご近所さんが、ガガガー、ゴゴゴ、グオングオンと雪除けを始めるのにも、当然ながら出遅れていた。なぜ、みなさん、そんなに早くから？ 私はゆっくりやらせてもらいますヨ。ハイ、そう考えた私は愚か者でした。通勤の車の轍ででこぼこに圧雪され、ほんのわずかとはいえ上昇する気温によってゆるんだ雪は、それはそれは「おぼだぐで（重くて）」。早朝の倍以上の労力が必要だ。

そんなことは、ここで暮らしてきた人にとっては何十年、何世代と積み上げてきた「当たり前前」なのだ。それをなぜ私がおもしろがつたり、くどくど説明しているのか、きつと不思議がるに違いない。暮らしてみればわかること、暮らしていないと想像の及ばないこと。

そんなことがたくさんある。そして、それこそが「ここで生きる」という営みなのではないか。

昨年三・一一の震災とその後の原発事故で、多くの農民が耕地を奪われた。地震や津波によって壊された土地ならまだ再生の望みはあるだろう。だが、いつになったら、放射能に汚染された土地で食べ物をつくる日が来るのか。

「農業を続けたい人には早く代替地を用意して支援してあげればいいのよ。日本全国に耕作放棄地はたくさんあるんだから。将来のわからないところで待つより、新しい場所と気持ちですぐにでも種をまけばいい



遊佐町から望む冬の鳥海山

じゃない」

事故直後、政府や電力会社の対応にひどく腹を立てながら、東京の友人が言った。私は同意できなかった。

農民は工場労働者とは違う。『派遣』された先で、どこでも同じように働けるわけではない。なぜなら、気候が、水が、風が、土が、人が、慣習が、あらゆること、違うからだ。田植えの時期の水温は何度か、いつごろ風向きが変わるのか、どんな動物や害虫がいるのか、どんな信仰や祭りがあるのか、用水路や農道の普請は誰とするのか、出荷や販路は誰を頼るのか……。工場内さえ、働く環境が保たれていれば、外は夜だろうが地下だろうが海中だろうが問題の生じない第二次産業と違って、「暮らしてみればわかること、暮らしていないと想像の及ばないこと」と密接不可分にしか存在できないのが、農や漁というナリワイなのだ。

「そりゃあ、はじめはたいへんだろうけど、『何年か』やれば、そこでのやり方がわかるようになるでしょ？」

そりゃあ、わかるでしょうね。でも、例えば、コメづくりは年に一回しかできない。すべてを知り尽くした土地でさえ、毎年、「お天気」と、人の知恵との根比べのようなものだ。だから、日本の農業は、農家という世襲によって、技術や知恵を上手に受け渡し、発展・存続してきた。代替地で耕作するということは、その根比べの知恵袋を一から作り始めるということだ。『何年か』だって？ そんなに軽く言うべきではない。何十年という単位のはずだ。

ある土地で農民（漁民も）であるということは、「ここで幸せに生きる」という決意なのだと思おう。

悔し涙に唇をかみしめながら代替地へ移った人も、汚染の懸念される土地に残った人も、それぞれがそれぞれの人生の根を「ここ」に下ろし直したのだ。

「農協も県も放射能検査をしています。前と何も変わっていないんです。なのに、消費者のみなさんは買ってくれない。直売所でいつも売れ切れだった切り花も、今はほとんど売れ残って返品される。花ですよ、食べ物ではないんです」

昨年十一月、東京のある集会で三春町の女性が訴えていた。このたいへんな状況の中で頑張り続けられる支えは何ですか？ 静岡から来たという男性が質問した。思いがけない内容だったのか、彼女はしばらく無言で考えた後、こう答えた。

「ずっとこんな状態なものですから、稲刈りができるのか、稲刈りはしてもコメが売れるのか、不安でした。でも夫が言ったんです。もし、放射能が出て、オレら、つくったものは食うべな。私も、うんって言いました」

放射能が出て、つくったものは食うべな――。

そうだよ、そうしよう。買って食べるだけの者にはわかるまい。これは、つくっている



氷の柱になった二の滝（遊佐町）

Photo : Suzuki Kyoko



凍結した玉簾の滝（酒田市）

者の特権だ。暮らして労働と収穫物が不可分な農民なのだ。収穫したものが利用し尽くせないなら、次の種まきにつながらない。今年の時間を、今年の労働を、今年の暮らしを、来年につなげない。

人が一人そこで人生を送っている。そこで幸せに生きるために、土地と結びついて暮らしている。そのコツコツと積み上げつないできた決意と誇りは、東電が放射能をまき散らしたぐらいで、砕けない。

質問者や会場の人が、どれだけ彼女たちの「決意」を受け止めたかはわからない。TPP賛成派の中には、より安全な食品を求め、放射能汚染の心配がない輸入食品を求める声もあるらしい。あわれな人たちだぜ。

〈鳥海山麓だより5〉

イガイガの正体

鈴木京子

今年の日雇いは、三月七日、メロンの苗づくりから始まった。

それから五カ月。種から面倒をみたメロンは二〇〇〇ケース、スイカは五五〇ケース。お盆までにはみな、きれいに磨いてパンツをはかせ、おでこにシールを貼ってやって、どこかに引き取られて行った。箱詰めのとときの気分は妙に感傷的で、お前も無事に都会に行けてよかったな、そんな言葉をかけたくなる。五カ月も世話をすると、相手が植物でも売り物でも、やっぱり情が移るネ。

そして、先週まで収穫作業をしていた同じ畑で、今日は、ぞんざいに根ごと引き抜き、草をむしる。これがかたいへんなんだなあ！

なにしろ砂丘地だからネ。太陽の熱はすぐに砂地を熱し、靴底から足裏を焼き、地面についた膝を焼き、草をつかむ手のひらを焼く。天と地からジリジリと焼かれる。まるでグリラの中の、鱈の開きのようだと自分を思う。八月末にはここは大根畑に生まれ変わる。

四月十日過ぎ、ちようどイネの種まきの頃だった。この農家で労賃のほかに白米五キロを一袋いただいた。栃木県のコメだった。なぜ？ この家も六町歩（六ヘクタール）の田を持つコメ農家なのに。それがおかしな話なのだ。少なくとも私にはそう思えた。

私の暮らす遊佐町の農協は、一二都道府県に約三五万人の組合員を持つ消費生活協同



遊佐町から望む八月夕刻の鳥海山

組合（生協）と四十年以上の提携関係にある。一九七一年にササニシキ玄米三〇〇〇俵を初出荷して以来、今では町内のコメ生産量の約七割が生協に出荷され、そのすべてが減農薬栽培だ。冷害により全国的な大凶作となった一九九三年には、自家消費分（飯米といえます）を出荷にまわす「一俵供出運動」を展開して、なんとか生協組合員にコメを届けようとした。さらには、この凶作をきっかけに、不作のときの農家収入を補填するため、生産者と消費者双方が出資する基金を設けた。こうした関係は、日本の提携産直運動の歴史の中では、その規模と

取り組み内容において一つのモデルケースとなってきた。

その生協には、遊佐町のほかにも北海道、長野、栃木、千葉にコメの提携産地があつて、それぞれの地で同様の交流と運動がつくられている。しかし、福島第一原発事故の影響を受け、北海道と山形のコメに申込みが殺到する一方で、関東圏の産地のコメが売れなくなったのだという。

もちろん、生協は独自の安全基準値を定め、それをクリアしたものしか扱わない。それでも、山形産は例年の一年分を半年で食べ切ってしまう勢いなのに対し、栃木産は在庫が減らない。

そこで、遊佐の提携生産者たちは、自分たちの飯米を一人一俵ずつ生協に供出し、自分たちが栃木産を買って食べるという運動をしたのだ。四八〇人の提携生産者のうち、一八三人が栃木のコメを買ったという。

ある生産者は、妻と息子二人に「生協の検査で安全が確認されているのだから大丈夫、生協組合員と同じお米を食べよう」と話して理解を得たという。また、別の生産者は「同じ稲作農家として他人事ではない。オレとオツカア（妻）で食うよ。でも孫にはうちのを送ってやる」と話した。

この背景には、遊佐は昨年産が不作で、生協との契約数量一〇万俵を五〇〇〇俵下回った事情があるという。だが、その程度の不足なら過去にもあつたし、これからもあるだろう。生協はその度に、農家に飯米を供出させるのだろうか。さすがにそんな非情なことはいないだろう。そもそも、そういうときのために複数の産地を抱えているはずなのだから。

間違いなく、これは「美談」だ。

生協のホームページ (<http://seikatsclub.coop/activity/20120214.html>) でも、町や農協の広報誌でも、そう伝えている。ただひとり私だけが、喉の奥の小さな小さなトゲのように、あるいはメロンのアレルギー反応のように、咳をしても水を飲んでもすすきりしないまま、今もイガイガが残っている。

私には「風評被害のツケ回し」に見えたのだ。いったい、誰が飲んだ酒の勘定を、誰に払わせているのか……。

コメ農家が飯米を購入して食べるのも異常だが、コメ農家に買われるコメの生産者ももっと混乱するのではないか、尊厳を傷つけられやしないか。たかだが日雇い労働者の私ですら、出荷される農産物を前に、買う人の顔を思い浮かべ「おいしく食べてもらえよ」と願う。なのに、丹精したコメは消費者のもとには届かず、ライバルであるはずのコメ農家の米びつに収まり、代わりにその農家のコメが消費者に買われる。なんか居たたまれないヨ。遊佐のコメ農家は、もしかして、ひどく傲慢なことをしたのではないか……。

だけどネ、やっぱり売れないのが一番困るのだ。売れなかつたら栃木の生産者は困るのだ。どんな理由でも、どんなに理不尽でも……。

Photo : Suzuki Kyoko



メロンの授粉を手伝ってくれるミツバチたち。巣箱ごと畑のトンネルに入れるだけ



田んぼに海猫がいる日は海が荒れている。荒れた海でエサを探すよりラクチンなんだって



一服の時間はもちろんスイカ



毎年の行事。自分で漬けたものが一番おいしいね

飲み込むこともできず、吐き出せもせず、悔しいのか切ないのか理由のわからない涙が目尻に滲む。このイガイガの正体は何だろう。

〈鳥海山麓だより6〉

幼なじみ

鈴木京子

茨城県の北部の、田んぼの多い田舎町で生まれ、高校卒業までそこで暮らした。十代の入り口ですでに、「この町を出る日こそが自分の人生の始まりの日」と、思春期にありがちな頑さで思いつめていたから、卒業後は、片手で数えられるほどの友人を残し、あの町での付き合いは自分から消してしまった。

だから、私には「幼なじみ」でくくれる人間関係がピンとこない。

コメ倉庫の季節雇いも終了間近となった十月下旬。コメの納入に来たハジメさんに「倉庫終わったあとは何してる？」と声をかけられ、赤カブの収穫を手伝うことになった。

赤カブの収穫は、ある程度の大きさになったものだけを抜きながら集め、次に葉っぱと根っこを包丁で切り落とす。畑のあちこちにできた山を数人で囲み、ひとつずつ片付けていく。モモちゃんとチエコちゃんとハジメさんと私の四人で四日間作業した。

モモちゃんとチエコちゃんはハジメさんの妹の同級生なんだってサ。つまり、三人とも同じ幼稚園、小学校、中学校に通い、同じ地域でそれぞれ新しい家族をつくり、子どもたちも同じ学校に通わせ、そして六十代の今もチャン付けで呼び合う。赤カブの葉っぱを切り落としながら、五十年前のやんちゃ（いたずら、悪さ）の裏話をあかし合い、大笑いする。すごいなあ！



遊佐町から望む冠雪した十一月の鳥海山

「故郷を捨てたモン（者）にはわがんね世界なんぞろ？」

ハイ、わがんねです。

ちょうど去年、高校卒業二十五年の記念同窓会の案内が来たけれど、行きたい気持ち半分、でも結局はこわくて行かなかった。

何がこわかったのかな。同窓会の様子を撮影したDVDを見てはつきりした。行かなくてよかったと思っただから。「変化」が受け入れられないんだ。ハジメさんたちみたいに年月を共有していないから。

十一月上旬、山形市内の友人三人が庄



雨の中、赤カブ収穫していたら、二重の虹が出たよ



農家さんが玄米を1トンパックに詰めてもってくる。品質を検査し、重量をはかって入庫する



秋のすごい味覚。近くの清流でトオルさんが採ってきてくれる。ドロドロにすりつぶして、みそ汁になる

内に遊びに来てくれて、隣町にある鳥海山麓の山荘で温泉と食事と静かな夜を楽しんだ。お風呂から部屋に戻るとき、廊下の先に浴衣姿のハジメさんがいた。おいびつくりした後から聞いたら、「青年団活動三十周年OB会」だって。宴会場には、モモちゃんもチエコちゃんもいたんだって。

〈鳥海山麓だより7〉

隣の女の子

鈴木京子

まだ雪の残る三月から種をまいて苗を育て、田植えの準備をしながら畑に植え付け、住民運動会を抜け出してまで芽かきに追われ、暑さに耐えてタマ落としと皿敷きをした。十日程休んで「いよいよ来週から出荷だぞ」という七月二〇日過ぎ、ケイコさんから電話が来た。

「もっけだどものお(申し訳ないけれども)、なんだか仕事にならねみでだ。昨日までは何でもなかったんども、今日見たら三分の一は葉っぱも実も黄色くなっでしまってのお。これだけ出荷できねもんのお。もっけだあ……」

長く続いた雨ですっかり弱ってしまったメロンは、その後の猛暑を耐えることができなかつた。翌日、生き残ったメロンを数個「仕事がなくなつたお詫び」だと言って届けてくれたケイコさんから、残りも日を追うごとに黄色くなつて、一二〇〇本がほぼ全滅したと聞いた。

ケイコさんちは、コメと畑の収入がほぼ半々の専業農家だ。今年は春先の大根も、雨不足で去年の半分しか出荷できなかった。「お天気のことだから、しょうがねっ」と、ケイコさんは痛々しく笑つてみせた。

しかし、それでは「産業」としての競争には勝てない。だから、ヨーロッパの大生産地は野菜も花卉も屋内での水耕栽培が主流だ。日照も害虫もコントロールでき、収穫物を人力でエッチラオッチラ運ぶ必要もない。数量も行き先もバーコードで管理されてクレイーンが積み込み、無人のレー尔の上をコンテナが整列する。

日本でも消費者の「有機」志向の高まりによって、この「野菜工場」は増加しており、東日本大震災で津波による塩害を受けた地域の「復興策」としても注目を浴びている。だけど、それでいいのかね？

うちから八〇メートルほど離れたお隣には、小学校低学年の女の子がひとりいる。酪農を営む一家で、じっちゃんとはっちゃん、それにお父さんとはよく顔を合わせる話もするのだが、お母さんらしき人に会つたことがない。もう六年間も、女の子が五歳ぐらいの頃からずっと。

ある日、その女の子が家の前の道路で、三〇代後半の女性と絡み合うように遊んでいた。あれがお母さんなんだな、なんで普段は見かけないのかな……。少し下品な好奇心をそのままにできず、同じ部落のノリコさんと焼き鳥屋で一緒になつたとき、つい聞いてしまつた。



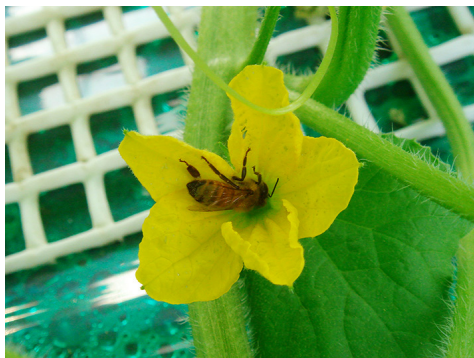
ミツバチの塊：この巨大な松かさ女王様を取り巻くミツバチの塊。4日間くらいこの状態だったが、女王様が飛び出すとみな一斉に後をついて行ってしまった。どこかのメロン畑からの脱走ミツバチ



ヤモリ：毎年、夏になると、毎晩7時半過ぎに居間のサッシに現れる。去年と同じヤツなのかな？ 今年は大小3匹を一緒に見たので、家族が増えている？



メロン苗：ケイコさんちではハウスと露地を合わせ、約2000本のメロン苗をつくる



着果完了：雌花にミツバチが頭から突っ込むと、ほぼ100%着果完了！ この状態のミツバチは蜜を吸うのに夢中で、人が作業していて葉っぱがガサガサ揺れても気にしない

ノリコさんによると、女の子のお母さんは韓国人で、あの家にとっては二人目の「嫁さん」だという。一人目は中国人で二年くらい居たらしいが、年に三カ月間の里帰りの後、帰って来なかった。そして、女の子のお母さんがやってきた。彼女もまた、年に三カ月くらい、韓国に帰るらしい。ん？ 見かけないのは三カ月どころじゃないよ。

「東京で働いてんだと。国に送るカネがいるんでねが？ で、たまに帰ってくると、子どもが恋しがって恋しがって離れなぐで、たいへんなんだ。んだよのお、子どもだってさみしいよのお。んども、あのヨメさん、東京に行くようになって、すっかり垢抜けてきれいになったって評判だっけえ」

六〇歳前後の息子とその両親が営む酪農という家族農業に、彼女は必要とされないのか。あるいは、彼女が東京で働くことは家族農業で得るよりもたくさん稼げるのか。なぜ、そのカネが必要なのか。そうすることを、彼女が希望したのか、家族が望んだのか。聞いてみたいけど、けっして聞けないナ。

女の子は今後、母を、父を、祖父母を、そしてこの家族の「事情」をどのように理解し、受け止めていくのだろうか。

〈鳥海山麓だより 8〉

やっけ

鈴木京子

「冬がなければと思うでしょ？」

東京の友人らによくそう聞かれる。私の答えは「ヤアダア！ 冬がなかったら一年中働いてなきやならないんだよ！」だ。

クリスマスをはさんでの一週間、ミネコさんちで葉牡丹の出荷作業を手伝ったら、あとは二月末まで「冬眠」だ。この冬眠期間があるからこそ、春夏秋冬を、太陽と大地に感謝しながらだを使つて働いて暮らせるのだと思う。

刺し子教室に「復学」し、映画のDVDを一日中見て、読みたかった本を片っ端から片付ける。通年週一回の刺し子教室では、同期生はとくに修了証をもらい、私は留年三回。でも、農家仕事のない冬に刺す、これこそが伝統的な刺し子ライフなのサ。

冬眠期間中の稼ぎは、時給七七〇円のお風呂掃除だけになる。週四日、夜の八時半から三時間、

雪の中を近くの温泉施設に通つて、宴会場の片付けをし、サウナや浴槽を亀の子タワシでゴシゴシ洗う。やつと月四万円弱の収入を得る。それでも、ゼロになるよりはいいヨネ。夜の仕事だから農家仕事がある季節もできる。始めてからもう二年が経った。

十二月の始めごろ、お風呂掃除歴十年以上のムッチャンが、パート仲間全員に、古米を、申し訳なさそうに、でもかなり強引に配った。

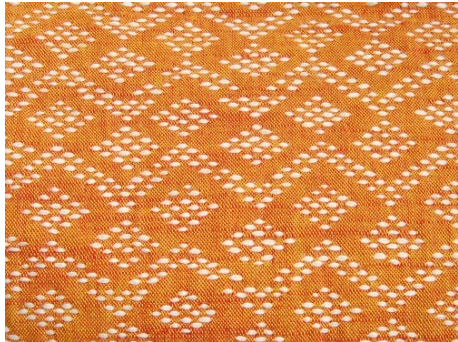
「新米も出て、もつけどども（申し訳ないけれど）手伝つてくれえ」

近所の農家さんから三〇キロ袋をもらい困っているのだとか。ムッチャンの娘も農家だし、ほかのパートさんたちも自分あるいは親戚の誰かがコメをつくっている。このあたりでは、余つて困っている人はいても、「コメがなくて困っている人」はごく稀だ。

年が明けてからもまだ、ムッチャンは「コメ、いらねが？」と騒いでいるので、コメを必要としている人を紹介した。野宿者に炊き出し支援をしている仙台のグループだ。「送料は送る人の負担になるけど、余っているなら……」と、恐る恐る言ってみた。即答だった。「おらあ、やっけだあ（面倒くさい）」。

「ああいう人もやあ、仕事も家もねぐているんだば、わがまま言つてねで、田舎に帰つてくれればええんだよのお。田舎だば、食えねつてことはねえ」

ハナチャンがそう言うと、その場にいた四人はみな同感のようだった。



刺し子 2014 シーズンの新作！

刺し子部分には会津木綿を使い、色味は緑、紫、黄（インド綿）を全体に生かしました。マチ部と肩ベルトの、共通の刺し子もいいでしょ？



これは3年前に作ったメンダリ（前掛け）。リバーシブルで裏はかわいい拵です

本当にそうかな？ 田舎なら生きられるかな？

もちろん帰る田舎なんかない人もいるし、田舎がある人だって、もしかしたら都会で衣食住に困る以上の、「どうしようもない生き難さ」に曝されることをわかっているから、帰らないのじゃないだろうか。私は実家を出てからずっと、いつホームレスになるかわからないと覚悟しながら生きているけど、ホームレスになったら、きっとここにはいられない。田舎は、人も環境も、ホームレスという生き方を許さない。

都会には、ホームレスとして生きられる多くの無関心と、ほんのちよつとの手助けがある。そして、その無関心という「自由」のほうが、田舎の「どうしようもない生き難さ」よりもマシ、と思う人が確かにいるのだと私は思うよ。

ゲンさん

鈴木京子

大型連休の後半からサツキ（田植え）が始まった。トオルさんちに二日、続けてエイジさんちに六日。三日空けてまたエイジさんちの無農薬を植えに二日。それで今年の田植えは終了だ。

ちょうどエイジさんの前半が終わるころ、ゲンさんから電話が来る。「オレは終わったよお」。

ゲンさんは、鳥海山の麓の「白井新田」と呼ばれる地区で暮らしている。白井新田は、庄内藩が藩校致道館ちどうかんを開設（一八〇五年）するための資金源（学田）として、白井矢太夫により拓かれた。海拔二〇〇メートルくらいの、絵に描いたような「中山間地」の段々田んぼは、六条植えの田植機で二往復もすれば、また一段上下して移動しなければならぬ。八条植えで四、五回も往復し、一往復に七、八分かかるエイジさんの田んぼとはまるで条件が違う。同じ「鳥海山麓」でも海拔二〇メートルくらいの私の家から見上げると、ゲンさんのうちはまるで鳥海山の一部に見える。

子どものいないゲンさんは、父親を見送った後は連れ合いのヒロコさんと二人でコメづくりをしてきた。でも、数年前から病のためヒロコさんは田んぼに出られなくなった。ゲンさんは、種まきや田植えなど複数の男手が必要な時はシルバー人材センターに派遣を頼むが、土詰めやソネ洗いなど、女手ひとつで良い時は私を呼ぶ。シルバー人材センターが「女性の安全のために」女性一人だけの派遣をしてくれないからだ。このことでゲンさんは以前とても嫌な思いをした。

シルバーに限らず、女性と男性では手間賃が違う。ゲンさんのような家族農業規模では軽作業に男の手間賃を払うのは痛い。ゲンさんがシルバー人材センターに「女性一人」の派遣を強く要望したら、「エロじじい」呼ばわりされたのだ。さらに、シルバー人材センターは三時間とか半日とか「かった時間だけ」の支払いを嫌がる。

「かっちゃん（私のこと）みたいにちょっと助けてくれる人がいればよお、オレみでえ年寄りだったまだまだコメつくれるんだ。去年のコメ、もう全部売れましたヨ。冷蔵庫、何もないヨ」。とくに、中山間地適応品種（平坦地では高温で品質低下）の「里のゆき」は遠く愛知から引き合いがあったのだと、ゲンさんは自慢する。

ガタゴト、バシヤバシヤとひたすらソネを洗う私の周りで、ゲンさんはわら束を燻いぶして虫除けにしながら、木製のソネを運び、釘を打ち直して修理し、十字に積み上げていく。

帰り際、七五〇円掛ける八時間分の手間賃と領収書を交換した後で、ゲンさんは「これ、お父さ



一番奥に黒く見えるのが砂丘の松林。その向こうは日本海。



ゲンさんは部落の簡易水道のポンプ小屋の管理者も務める。この水道は鳥海山の湧水100%。「年寄りでは先が長くない」という意味でゲンさんはよく「よしでかわら」という言葉を使うが、まだ意味がわからない。



鳥海山の頂上が近い！

ん（私の連れ合いのこと）と何か食べてくれ」と、財布から一〇〇〇円札を差し出した。有り難くいただくかわりに領収書を書き替えさせてほしいと言うと、ゲンさんはちょっと照れくさそうだった。

花を積もる

鈴木京子

エル・ニーニョだとか、長梅雨だとか、冷夏だとか、そんな春先の長期予報に反して、今年は雨が少ないカラカラの暑い夏になった。

メロンの収穫時期が例年より十日前後早まり、七月のうちに出荷が終了した。収穫直前に地域まるとごと全滅した昨年を思い、「ありがでのお」とお天気に感謝する。でもネ、人間様はどうしても「欲たかり（欲が深い）」だから、「頭の片隅でそろばんをはじき、心の奥底で「ちえっ」と舌打ちしてしまう。一番値段が高くなるお盆直前に、もう何も出荷できなかつたから。

それでも、メロンの場合は「売り切った」のだからよかつた。気の毒だったのは、お盆用の花を出している農家だ。

今年も盆前の五日間、いつもの農家に花を「積もり」に行った。この地域では、お盆に仏壇や墓前に供える花束を「積もり花」と呼ぶ。

そこは花の専門農家ではなく、八十代のユミコさん、その息子で五十代のマサルさんと妻のテルコさんの三人が、水田と畑作をしている専業農家。お盆には隣近所や親戚などから注文を受け、三百以上の積もり花をつくる。

ユミコさんとテルコさんは、自ら栽培したコメや野菜を、まずは生鮮で、次に笹巻きや餅などの郷土食、そして漬け物や乾燥野菜などの保存食に加工し、道の駅などで売っている。農民としての心と手業を持ったほんものの「百姓おんな」だ。

そのユミコさんとテルコさんが、春先から手をかけてきた花なのに、一本菊は大部分がお盆を待たずに咲いてしまい、小菊は直前の猛暑でつぼみごと茶色に「日焼け」していた。このまま世の中に出ることなくいずれ潰され、不足分は市場で仕入れなければならぬ。

「アンタ、畑、見ておいでよ。かわいそうだよオ、奇麗に咲いたのにねエ、誰にも見てもらえずうだられる（捨てられる）んだよ。でも、あれじゃアね、お盆本番にはアタシになっちゃうからさ、ババアはさ、ダメでしょ？」

毎年手伝いに来ている、ユミコさんより年上のカネコさんが言う。カネコさんは二十数年間、「東京」で働いていたから「標準語」で話す。

積もり花は、斑点入りのススキを背骨のように立て、その手前に様々な種類の菊、色鮮やかなケイトウ、トルコキキョウなどを「積もって」つくる。特に、濃紺やエンジ色で豪華な見栄えの「朝



今年は春先からの天候がよくて、ハーブから夏野菜まで、たくさん収穫できた。
 カモミール、青山椒、梅干し、きゅうり、なす、トマトが過去最高の量と質。
 きゅうりとなすは1日おきに浅漬けにして食べたほか、長期保存漬けに。

インゲン、ミニトマト、きゅうり、青唐辛子はピクルスに。
 これから、みょうが、エゴマの葉、シソの実を保存食にする。

左中の画像は乾燥中のレモングラス。



Photo: Suzuki Kyoko

鮮菊」は欠かせない。他の菊に比べ、栽培に手間がかからず水揚げ処理の必要もないこの花のことを、「チョウセンは強いからエライよね、テルコさんに楽させるからさ。花のチョウセンはいいのにね、北朝鮮はダメだ」と、毎年カネコさんは言う。
 「ススキとみそ萩が入れば、あとはセンスで積もれ」と言われるが、茨城の実家でも、同居人の実家の函館でも見たことのない独特の「様式美」を持っていて、三年目だけれどなかなかうまくも、早くもならない……。

コメ倉庫

鈴木京子

今年もまた、農協のコメ倉庫で季節労働をした。九月の彼岸前後から約ひと月、朝から晩までコメを買い入れては入庫する。今年でもう五年になった。

糶のまま受け入れて、乾燥・貯蔵・調整の三役を担うコントリーエレベーターとは違い、私が働く倉庫はいわゆる「バラ施設」だ。農家が自分で乾燥・脱穀・調整（粒をそろえたり異物を除去したりして製品として完成させる）を終えた玄米を、等級検査と計量をして買い入れ、JAブランドの一トンス袋に充填して低温倉庫で貯蔵する。二十人ぐらいの季節労働者のうち、だいたい三分の一が女性で、三分の二は去年も一緒に働いた人たちだ。

一日中、コメまみれ、埃まみれになって、一トンス袋を押し下ろしたり、三〇キロ袋の積み下ろしをするような重労働だが、時給は男性一三〇〇円、女性八〇〇円とこの辺りの相場としては「破格」だ。

男女とも定年後の六十代が多く、たまに失業中の三十代や四十代が紛れ込んでくる。二年、三年と続けて働くようになると、顔馴染みの間では「同僚」意識も育ってきて、「〇〇倉庫では二等米がよけい（多い）だ」と「××倉庫は慰労会で塩竈へバス旅行だ」となど、近隣の倉庫に妙な対抗心を燃やしたりする。

ただ、農家でない六十歳以下の労働者が入ってくると、一年目は何も言われないが、二年目には寄ってたかって説教される。「若いモンが、季節労働に毎年来るもんでねっ」「この一年、何してただ？ 本気で仕事、探したか？」って。

今年の若いモンは、私より長いキャリアの三十代が二人に、初めて来た二十代と四十代が一人ずつ。三十代のマサトはコメ農家の跡取りで、コメ倉庫が終わると、地元の酒造会社で春先まで働く。もう一人のイシカワ君は、三年目ぐらいまではみなに説教も心配も職の紹介もされていたが、今はもう誰も口出ししない。ずっと定職にはつかず、母親と二人暮らしで、独立した二人の兄からの仕送りがあるらしい。

二十三歳のササキ君は農家で、祖父母に近い年齢の集団の中で、気も体力も消耗させてクルクルと働いた。そのせいか、途中、体調を崩して三日休んだが、休み明けには「ご迷惑をおかけしました」と、カボチャパイを持参して出勤した。

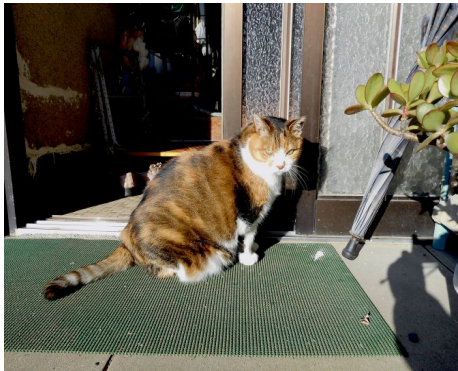
四十代のクロさんは、無口だが愛想が悪いというわけでもなく、長めの茶髪のせいか三十代にしか見えない。細身ながら力仕事には慣れているようで、年長者を気遣い、率先して三〇キロ袋の積



コメ倉庫の様子



普通の猫に見えるけど…



名前は「チビ」なのに、老父が猫かわいがりすぎてすごくデカくなってしまった実家の猫

み下ろしをしていた。ただ、自分で運転せず誰かに送迎されているという「ミス터리」を提供し、「免許がないか、車がないか、何らかの理由で免許か」と、女性労働者の間の最大の噂のネタとなった。終盤には「夜の仕事をしていた、朝の出勤までにアルコールが抜けていないから」という情報が出てきたが、誰も本人に確かめないまま、今年のコメ倉庫は閉まった。

さて、来年は誰とまた会えるかな。

車

鈴木京子

自動車の運転免許などまったく興味はなかった。一生、自分が車を運転することはないと思っていた。

私が育った頃は茨城の実家にも車はなく、家族は大人も子どもも、自分の足と自転車どこへでも行った。母が幼稚園の「ママさんバレーボール」の試合中にアキレス腱を切った時も、父が自転車で迎えに行き、後ろの荷台に母を乗せ自転車を押して連れ帰った。母は翌日から自転車を杖代わりに自力で接骨院へ治療に通った。

夜の星座観測会や台風で早引けになった時など、小学校まで保護者が迎えに来たが、やっぱり母は自転車 came。雨の時は黒い合羽を着て、私の黄色い合羽を持って。小さいうちは喜んで後ろに乗っていたのに、三年生くらいからだろうか、友だちの目が気になって、なぜか恥ずかしくて、自転車は押して二人で歩いて帰るようになった。母はいつも「乗ったらヨカッペヨ、重くネエから」

と言ったが、私は、三十キロ近い負荷をかけてこぐ母を気づかしたわけではなく、そんな母の自転車を水しぶきをあげて次々と追い越していく自動車の中の、友だちの目を気にしていた。母が必死でこぐほど惨めで、歩くほうがカッコ悪くなかった。

就職を前に友人たちが教習所通いをしているときも、就職して自活するようになってからも、車がほしいと思ったことはなかった。東京で暮らす限り、一生、不要だった。

ここに移住してくる時も、実家での経験から自転車で間に合うだろうと思っていた。六月に越してきて、七月、八月と快調に自転車を乗り回し、雨の日だって「母のように」合羽を着て刺し子教室に通った。

でも、九月に入り、出し風（陸から海へ吹く風、ここでは東からの風）が強くなると、それまで十分で行けた場所に三十分をかけても着けなくなった。坂道でもないのにこぐことができず、自転車は荷車代わりに押して歩いた。

十月になると、寒くて、晴れていても顔が痛くて、雨の日は家にひきこもった。やがて路面が凍り、雪が降り出し、積雪は三月まで続くことに気づき、絶望して、「運転免許を持たない人生」を断念した。移住から半年後の十二月二十六日、普通免許の交付を受けた。

七年間で中古の軽ワゴンを二台乗り継ぎ、三台めは思い切って新車の軽トラックにした。ちょうど節分に納車されたので「節子」と名付けた。軽トラックってすごいヨ、まるで自転車！ どんな



節子大根 無事に漬物工場に到着。二車線国道もがんばって走りました。



節子田植え 5月30日の鳥海山のおつぺんと節子。今年もゲンさんの田んぼへソネ洗いにきました。



反省 ソネ洗いの最終日、エイジさんちの入り口でこんなことになってしまい、深く反省。



ソネ洗い エイジさんちへ3日間通って3700枚のソネを洗った。



救出 お世話になっているクルマ屋さんがすぐ駆けつけてくれて、エイジさんちのリフトを使って救出。家主のいないうちに解決。45分間の事件でした。

ところへもクルクルとよく走る。
節子さん、五月は大活躍でした。田んぼから田んぼへと十日間も田植えして歩き、砂丘のメロン畑へも四輪駆動で駆け上り、泥んこになりながら畑で大根を積み込むと二車線の国道を疾走して漬物工場へ運びました。

ハジキ品

鈴木京子

七月上旬、同じ部落のセツチャンに誘われ、初めて、ノブオさん家の赤カブの収穫に行った。私のほかに、六十代と七十代の女性が六人、六十代のノブオさん、妻のコウさんの九人で、六反歩、連続十一日間の労働だった。

ノブオさんは代々のコメ農家だが、三割減反が強制される農政に見切りをつけ、三十年前、一から畑作に挑戦することにした。

「周りからはバカだって言われたよ、まだコメの値段が高かったから。コメつくってればカネになるのに、素人が畑なんかやって……。ンでものオ、もうコメはダメだってわかったんだ、オレはのっ」

安倍政権のポストTPP農政により、建前上、減反政策はなくなったが、今年もやっぱりコメ農家は「三割減反」を続けている。「米価維持」のためにと役場と農協が一体となって監視している

からネ（それは、こんな田舎では身動きとれないほどの縛りなのだ）。その三割の減反田にも、ノブオさんは、ニンニク、ウレイ、赤カブを作っている。

赤カブに続けてすぐニンニクの収穫となったが、私だけは別の農家でのメロンの出荷作業のため抜けることになった。それを知った仕事仲間が「アンタ行つてるとこで、ハジキ買わんねが？（買えないか）」と声をかけてきた。それを聞いてさらに「おれも頼む」「おれも」と数人が寄ってきた。困った。

ハジキ、つまり規格外品、B品ということもある。私の行っているカワマタさん家でもハジキ品は出るが、出荷しないものは、売れもしない。市場出荷の他に直販や直送もしていて、形がいびつだったり、熟し過ぎて尻割れしてしまったものなどは、そういうお客さんや知り合いにお礼やあいさつ代わりとして配る。つまり、カワマタさん家にとってハジキ品は「A品を買ってくれる人」のためにある。

数年前、カワマタさん家の畑に、イトーヨーカドーの名刺を持った男が突然やってきて、「いいですね、畑もメロンもいいですね」と褒めた後、B品を売ってくれと言った。カット・フルーツにするので形は関係ない、多少尻割れしていても構わない、かえってその位が甘くていい、この畑のメロンはいつごろ出荷できますか、と一方的にしゃべった。ちょうどカワマタさんがいなくて妻のケイコさんが対応したのだが、ケイコさんはすっごく怒った。いつごろ出荷できるかは天気による



梅干し 今年は去年の半分しか実がならなかった



スイカ ゴロゴロと磨いてから箱詰めします



益虫 おかげでアブラムシに勝ちました!



赤カブ 一人一つずつパラソルさして

からわからない、アンタは尻割れしたメロンをどうやって運ぶんだ？ 店に着くまでに痛むんでろ？ そんなものを売るのか？ うちのB品はA品と同じ値段だがそれで買うか？ バイヤーは苦笑いして去った。

ケイコさんはまだ怒りがおさまらない表情で私に言った。「B品だけつくっている農家はいない」。A品、B品はあくまで出荷時の規格であって、ケイコさんは種からずっと分け隔てなく育てた。「B品がほしい」というとき、そこには「安くて当然」という期待が必ず裏にある。カワマタさんがB品を売らないのは、市場出荷できないものでカネはとれないという生産者としてのプライド、そして買い叩かせないという農民としてのプライドなのだと思う。

蔵のしごと

鈴木京子

十一月から三月半ばまでの四ヵ月半は、地元の造り酒屋で働いている。

毎日、何百キロというコメを蒸して運び、翌日のためのコメを研ぐ。蔵の中でも温度は五℃以下、戸外に干す洗濯物は雪の中ですぐ凍って固くなる。一方で、一日のうち二時間程度は室温三五℃前後の麹室の中で作業する。寒いけど暑い。とはいえ、一日中「水わちゃ（水仕事）」だから、やっぱり基本的には寒いデス。

もともとは南部杜氏とうちがチームで出稼ぎに来て住み込みで仕込んでいたが、三十年ぐらい前から地元のコメ農家が働き手となり、今では杜氏も含め全員が地元の農家だ。かつて多くの家が冬場に東京などへの出稼ぎ者を出していた頃には、地元で稼ぎを得られる蔵人くらびとの仕事は人気があったらしい。しかし、競争力重視の「産業化」を迫られた日本の農業は、いまや大規模専業かサラリーマンと兼業の週末農家でなければ成り立たず、農耕を軸に複数の職業で生計を立てて暮らす「百姓」がいな

くなった。若者に限らず求職者は「通年雇用」を求め、蔵はなかなか働き手が見つからない。私の働く蔵も、夏前から職安に募集を出していたが、仕込みが始まっても人員が埋まらず、昨年より三十代が一人少ない、六十代二人、五十代一人、四十代一人、三十代二人、そして六十代女性と私の八人でスタートした。

十一月も終わる頃、吟醸仕込みで忙しくなる時期を前に「これ以上は待てない」と杜氏が自ら社長に掛け合い、シルバー人材センターから男性二人を派遣してもらうことになった。本当は二十代を求めていたのだから、やはり現場にはそれなりのしわ寄せがくる。さらに、二人のうち一人は仕事でも腰と膝を痛そうにするので、重いものを持つたり走ったりする仕事はさせられず、私たち女性ができることになった。シルバーさんの時給は八〇〇円で、私の時給は七五〇円だけどネ。

そんな状況の中で、力仕事が集まる若い衆（といっても、三十三歳と三十七歳なんだけど）には労働のきつさに加え、年配世代との待遇格差（時給が高いだけでなく、上から三人は雇用保険対象で蔵のない時期は失業保険を受給しているらしい）に不満がたまり、陰で「来年は来ない」と口にするようになった。

私は彼らと年配世代の両方が理解できない。まず、若い衆の不満はもつともなのだから、なぜ待遇改善の交渉をしないのかと思う。そして、それ以上に理解できないのが、杜氏も含めたジイさん世代の態度だ。彼らはよく「社長がケチだから」と言い訳するけれど、ともに働く仲間としてなぜ

若い衆と自分たちの待遇格差を何年も放っておけるのか。社長がケチなら、孫もいて年金ももらえる年代なのだから、子育て世代にその待遇を譲ってやれ！と私は腹立たしいのだが、ヒトってね、やっぱりみんな欲深い生き物なんだね、そんなことは考えもしないみたいだよ。

そして、私もまた「来年」はどうしようか、悩んでいる。冬場の収入源がほしいという欲と、こんな格差を放置する人たちと働けるのかという気持ちの間で。

〈鳥海山麓だより15〉

ムコだから

鈴木京子

今年の冬は雪がかなり少なかった。だけど、だからといって、春がことのほか早く来るわけではないんだナ。タイヤ交換も、カボチャやメロンの植え付けも、稲の種まきも、せいぜい三、四日早まった程度だ。

砂丘の畑作のお手伝いを毎年させてもらっているカワマタ家に、今年初めて稲の種まきに行つた。専業農家のカワマタさん夫婦、公務員の息子、元公務員の叔父さん、入り婿して兼業農家をしているカワマタさんの弟のシヨウジさん、この五人で去年までは種まきした。ただ、ビニールハウスでソネを並べる仕事を担当する妻のケイコさんが、去年はかなりたいへんな思いをしたことと、七十歳近くなった叔父さんも無理がきかなくなったため、今年は「人員増」となったらしい。

カワマタさん、叔父さん、息子、シヨウジさんの四人が、自宅の納屋で種まきし、軽トラック二台に積み込む。一台がいっぱいになるとシヨウジさんがビニールハウスまで運転してきて、ケイコさんと私、シヨウジさんの三人で並べる。私とケイコさんは次のトラックが来るまで小休止できる

が、シヨウジさんは暇なく働く。サボらない。

「あっち（納屋）でもこっち（ビニールハウス）でも働いて。たいへんだから、こっちで少しサボってから行けば？」と私が言っても、声もなく静かに笑うだけで、サボらない。並べ終わるとすぐに納屋に帰っていく。

「シヨウジさん、働き者だねえ〜」

「んだア、ムコださげのっ」

ケイコさんによると、もともと偉ぶるようなことのない次男だったらしいが、「ムコ」として生きるためには「気が利く働き者」である必要があるらしい。

そういえば、人柄を形容するのに「いかにムコさん」「ムコさんって感じの



田植え直後の鳥海山。田植えが終わると、こんなチョボチョボの苗なのに、人間の目には一面の田んぼが黄緑に見えます。写真で表現できないけれど。



Photo : Suzuki Kyoko

人」という表現をよく聞く。仕事先で一緒になったシルバーさんの一人は、先回りしてよく働くことに私が感心したら、「だって、オレ、ムコだものお」と自分で言った。この地域では「入婿が三代続けば蔵が建つ」みたいなことも言う。

その家のために尽くすことを自らに課し、そして世間もそれを期待する——生家を離れ、よその家に入って生きるとはそういうことなのか。だから、たいていの人は「ムコさんだからたいへんだ」と氣遣う。

じゃあ、ヨメは？ ムコ四%、ヨメ九六%が日本の現状ですからネ。

「旅」に帰る

鈴木京子

五月、トオルさんちの田植えから帰って、風呂に入ろうと服を脱ぐと、左の乳房が真っ赤だった。二、三日のうちにブツブツができ、ジリジリと痛み出し、上半身が浮腫んで、左腕が上がらなくなつた。田植えはまだ二週間ほど残っていたが、ここで農業労働者を廃業した。

六年前（二〇一〇年）に小さなしこりを感じたが、いろいろ調べ、考え抜いた末に、そのまま暮らすことを選択した。ギリギリまで自活したあとは、痛みや苦痛の緩和に最大限のことをしながら寿命を受け入れようと思った。三十代から四十代の十年間とその体力を、農村での労働に思い切り費やせたことは本当に幸せで、自分の選んだ癌との向き合い方に悔いはない。その機会を与えてくださった、この町のみなさんにはただただ感謝するばかりだ。

ただ、最後は「ただの田舎娘」から「私」という人間をつくった人たちが多く暮らす首都圏で、つれあいや友人たちに感謝しながら過ごしたいと思ひ、この町を離れることにした。



夏雲の鳥海山

この辺りでは、生まれ育った家を出て暮らしている人を、「旅に行った人」と表現する。東京で何年か働いた後に地元に戻った人は「旅から帰った人」になる。「だから、オメエは、旅から来た人だ」と、この言葉を教えてくれた人は私に言った。

旅から来た人——自分を定義するためのこの言葉が、私はとても気に入った。どこに行っても、私は、自分を「旅から来た人」と呼んで、しっかり生きたいと思った。だから、また新しい旅に出る。



最後の梅干し



灯油タンクにさえ暮らしの軌跡

Photo : Suzuki Kyoko